弟に逢ひしが、是時夜廻の者に誰何せられて取上婆と伴りて逃る。工藤祐經の假屋に招かれ、祐成を手引きして内に入る。曾我兄弟が敵討の後、祐經の弟伊豆二郎祐兼に捕へられて頼朝の前に引出され、曾我二子の首を見て泣いて死を請ひしが、頼朝及び朝比奈義秀に宥められて泣く泣く退去す。かくて後曾我二子の弟の禪師坊を起後の國上寺に尋ねて下る。頼朝・禪師坊に命じて曾我二子の社を富士裾野に建てしむるや、虎・少將顯主となり、西國四國の戰場の繪馬を掲げて祭典を擧行す

（加增曾我）

とらへいじ　虎平次。 熊源太の弟なり。兄と共に藤原孝房の室及び中務秀光等の渡路の方へ落ち行くを追躡し、孝房の室を殺害するなど惡行多かりしが、遂に印南彌七郎に搦められる（賀古敎信七墓廻）

とりゐのさんみ　鳥居三位。 蒲田明神の神主なり。春彦尊に一味して王妃長歌を搦めしが、橋立左衞門秋廣の魂と入代りたる春彦尊に殺さる（持統天皇歌軍法）

なかあき　今川左衞門尉仲秋。 今川伊豫守源貞世入道了俊の嫡子なり。京都に在勤中父の危篤の報に接して歸國し、父の枕邊に侍して、制詞條目一卷を讓り受く。いたく父の死を悲しみ、冑砥藤次を伴うて亡父の墓に詣で、愛人千鳥の前に遇ふ。是時叔父貞廣來つて荒川近牛・大道寺勝房反心ありと稱して仲秋を欺き、尋で反旗を擧ぐ。仲秋・千鳥の前虎口を遁れて三河國岡崎なる松葉川に落ち延び、橋守の結城右衞門太夫種春に助勢を請へる際、貞廣の家士片桐才藏に追擊せられ、春戰して才藏を殺し、大擧して駿府城に貞廣を攻めて陷れ、了俊の跡を相續す（今川了俊）

ながうた　長歌。 吉野郡の紙漉國栖の阿戀の女にして、母に仕へて孝なり。夏仁親王の王妃に選ばれ、蒲田明神にて裝束始の儀式を行へる際、春彦尊に一味せる神主鳥居三位に搦められしが、秋廣の魂と入代りたる春彦尊に助けられ、吉野の里に歸つて風月と契を結ぶ。風月は夏仁親王なり。是時雷震法師等に驚擊せられ、風月・長歌相共に春日山に遁る。かくて後夏仁親王と共に笠置山の窟に隱れて萬九郎に養はれしが、遂に惡人滅んで泰平の御代となる（持統天皇歌軍法）

なかがは　中川。 足利將軍義敎御靈所の侍女にして、藤内太郎家治と慇懃を通ず。赤沼入道草滿反心あり、將軍義敎を已が家に饗して其印綬を奪ひ、また中川を欺きて義敎の刀を奪はしめて、中川を誅中に凍死せしむ。中川時に歲二十、乃ち幽靈となつて斯波義將及び家治に逢ひ、赤沼の反心及び己が最期の悲慘を告ぐ。赤沼父子反して吉野の城に據るや、中川の幽靈再び現はれ、赤沼父子を引立てて義敎の前に突出す（雪女五人羽子板）

なかがは　中川。 新田義貞の部將畑六郎左衞門時能の妻なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定を開くや、中川其席にありて、義貞の弟脇屋義助と和睦せらるべきを述べて義貞を諫む（相模入道千疋犬）

なかくに　能勢判官仲國。 美濃國の住人にして源氏の家士なり。源頼光の來れるを厚遇し、種種の贈賂を飾りて其心を賺む。孟蘭盆會の日頼光と酒宴の後窃に妻を呼び、清原右大將高藤の差出したる封書を見せて其心中を問ふ。妻思案の後頼光を討ち奉らんといふに同意し、次の間に隱れて其樣子を窺ふ。然るに妻は我子の冠者丸を斬つて頼光の身代りたらしめ、尋で自刄せんとす。仲國乃ち妻の自刄を制止して頼光を落し參らす（蟻山琵）

なかしひめ　中帯姫。 阿閇府生諸門の女にして、圓大臣の養女となり、安康天皇の女御となつて懷胎せられしも年を經て產氣なし。雄略天皇御祝宴の時、かねて中帯姫に繼慕せし大草香の臣の魂魄、姫の飲まるる盃の中に入るや、俄に心亂れて雄略天皇を慰藉せらる。よつて勅を下し姫を玄上廷尉之介鶴國の館に預けらる。阿閇郡領諸宗・鶴國の館に亂入して姫を奪ふ。諸門の妻・姫の腹を裂きて嬰子を出す（浦島年代記）

ながすね　筑波長脚。 外濱忍熊の重臣なり。忍熊の使者となつて貢物を朝廷に奉り、以て景行天皇第二の姫宮神醫姫の御降嫁を奏請し、同じ目的にて來朝せる八十臺師の使者阿蘇厳魂との競馬に賈け、暴言を放つて退去す。後、神醫姫を三草河原にて奪はんとして殺さる（日本武尊吾妻鑑）

なかつね　大炊介仲經。 父藤右馬尉仲成の逆心を諫めて勘當せられ、山城國西の岡樫原の土民となり又次郎といふ。多治見春國に欺かれて牛を奪ひ北岩倉の深山に入り、大海原王子等の反逆を見て大に怒り、力戰して敵を破り春國を殺して我家に歸る。かくて亡父の仇橘勝藤を狙へども行方知れず。よつて勝藤の父濱頼を奪去り、我子を殺して妻の乳を與へて厚遇しながらも、外面伴つて濱頼を殺したる高札を立て、勝藤の斷入るを待受けて格鬪せしが、その心を知つて相和し、共に大海原王子を狙ひ弘法大師雩御修法の場に刺す（嵯峨天皇甘露雨）

ながとし　名和又太郎長年。 出雲國の住人にして忠臣なり。飲食物行商人となり又六と稱して、坊門清忠が後醍醐天皇を幽閉し奉れる番所に來る。折しも小山田高家の妻比丘尼に扮して番人に酒を勸め醉はせて眠らしむ。其間に又六塀を破り天皇の御供して大和路を指して逃ぐる途に楠正行母子に遇ひ、相共に天神森に據つて義旗を擧げ、寄來る敵を破り、天皇に供奉して吉野に急ぐ（吉野都女楠）

なかなり　惡右馬尉仲成。 猪甘の連の末裔なり。大海原王子の逆心に一味せしも雖病に罹りて死し、猪甘の連の魂魄と結んで蘇生し、大海原王子と共に嵯峨天皇を攻めんとして橘判官勝藤に刺殺さる（嵯峨天皇甘露雨）

なかのり　般若五郎仲則。 在五中將業平の家臣にして膂力あり。伴大納言宗岡の家來基國が中宮高子の君を奪はんとして來れるを捉殺し、業平に陪して河内國高安の里に至り生駒姫の家に身を寄せしが、姫の伯父大炊之介が惟喬親王に一味して清和天皇を奪ひ去らんとするや、仲則・大炊之介と格鬪して天皇を奪ひ返す。後、惟喬親王・清和天皇と御位爭ひに負け、宗岡等と共に暴行に及ばんとせられしかば、仲則乃ち宗岡に飛付きて首を引拔く（井筒業平河内通）

なかはら　石見守中原。 日野中納言資朝の重臣なり。逆心を抱き窃に朝敵相模入道に内應し、資朝の跡を絕たんとして、玄惠法印に資朝の一子阿新丸の薙髮を頼みしが、資朝の家の子左衞門尉藤原に妨げられて果さず。また茶會に託し資朝を招いて刺せんとせ

しが、この時も藤原に妨げられて果さず。八瀬里に賣朝を襲ひ猛めて六波羅に送り、相摸入道より莫大の恩賞を得て驕奢を極め、奈良に薪能を催せし際、阿新丸及び賣朝の遺臣に襲はれて殺さる（本朝用文章）

ながふさ　冷泉文次兵衛長房。　古朋輩の駒形一學兼綱の後妻に情繼姦し、兼綱を暗殺して其後妻及び兼綱の前妻の子造酒之進房平を我家に引入れて妻子とせしが、清澗を生むや之を東寺の四塚の傍に棄て、福島に閑居して九綿などの小賣商を營みしが、或日足利將軍義輝の室及び房平・清澗の三人尋ね來る。「ふさひら」の條を見よ（津國女夫池）

ながらのつぼね　長良局。　坂上田村麿の室岩戸の前の乳母なり。宗金刑部山國反するや、岩戸の前に陪從して勢州鈴鹿に下る（田村將軍初觀音）

なつ　阿夏。　播州姫路の米商但馬屋九左衛門の娘なり。龍野の某家に婚約あり。然るにお夏手代の清十郎を愛して龍野に嫁するを肯ぜず。清十郎主家を放逐せらるゝや、お夏狂亂となり清十郎の跡を慕ひて家を出で、熊野修行となつて清十郎の許嫁の女おさん等に遇ひ、（この所笠物狂の妙文）相共に清十郎の刑場に赴く。お夏塔外に狂奔して死を共にせんことを請ひ、一服の煙草を吸付けて清十郎に呑ませ、清十郎の自害を見て、お夏は捕吏の鎗を奪うて咽喉を突きしかども死せず、尼となつて清十郎の菩提を弔ふ（五十年忌念佛）

なつひとしんわう　夏仁親王。　持統天皇の皇子にして、春彦尊の異母弟なり。天皇・春彦尊の暴戾を憎みて位を夏仁親王に讓らんとし給ふや、親王乃ち兄を踰えて位に卽は弟の道にあらずとして、宮殿を出でて吉野の奥に迷入り、風月と名乘つて紙漉萬九郎の家に出入り給ひ、萬九郎の妹長歌と殷懃を通じ給ふ。是時惡僧雷霊等に襲はれ、辛じて長歌と共に春日山に落ち延び給ひしが、敵の追擊急にして危險御身に逼りし時、春日明神鹿に化して示現し親王を救ふ。かくて親王・長歌相共に笠置山の窟に忍ばれて萬九郎に養はれ給ひしが、萬九郎・淀次郎照房の忠節により遂に飛鳥の里にて持統天皇の軍に合し、春彦尊を滅し給ふ（持統天皇歌軍法）

なとら　紀名虎。　惟喬親王と共に棄策する所ありしが病に罹つて死す。親王王　繼承の爭に負けて比叡山麓小野の里に閑居し、名虎の髏骨を祭りて招魂の法を修せらる。名虎蘇生して親王と共に謀反を企て、清和天皇の殿中に現はれて暴行に及びしが、在五中將業平が差向けたる神鏑に照されて忽ちもとの髏骨となる（井筒業平河内通）

なほざね　熊谷次郎直實。　武藏の住人にして源氏の家臣なり。壽永三年正月下旬一の谷の合戰に敦盛を呼返して格闘し、首を刎ねんとして愍然の情に堪へず、之を助けんとして味方より罵られ、是非なく討果す。然るに我子の小次郎直家もこの戰に疵を負ひて死す。是に於て直實深く人生の無常を觀じ、落飾して法然上人の弟子となり、蓮生法師と法名して念佛三昧に入る。法然上人論議の席に侍して口唱念佛に反對する者を怒りしが、重源和尚に悟されて和ぐ。江州粟津の庵室にある時、清姫・種直の二子來つて一夜の宿を請ひしを我子と知らずして拒絶し、種直の病死を見て我子なるに驚きしが遂に父たるを名乘らず、一片の回向をなして葬送する際、平山武者所季重來つて蓮生の心中を察し、清姫を貰ひ受けて去る。蓮生死して鬼に責められしが、念佛の功力によつて淨土に往生す（大原問答青葉笛）

なほびめ　直姫。　蟹丸と契りて子を生みて棄て、右大辨早廣の亂を避けて小幡の里千手入道の家に蹈れ、早廣の來襲に遭ひしも千手入道父子の忠勤によつて免る。蟹丸盲目となりて逢坂山に棄てられたるを直姫尋ね行きて之と逢ふ（蟹丸）

なりひら　在原業平。　院宣を蒙りて須磨に下り松風の鹽屋に泊る。伴健宗を欺いて行平の雛を救ひ、行平と共に歸京して戴人頭となる（松風村雨束帶鑑）

郎麻の般若五郎仲則を召具して中宮高子の邸に至り、高子を連れて宮中に歸る。是時惟喬親王及び紀名虎の幽靈來襲し天皇・中宮を奪去らんとす。業平神鏑を名虎に差向けて之を退治し、天皇に供奉して修行僧に身を俏し、歌念佛を唱へて河内國高安の里に落ち行き、伊駒姫の家に便る。惟喬親王兵を驅げ、清和天皇の軍と戰はんとする際、業平戰を止めて其勝負を相撲によつて決せらるべきを言上す（井筒業平河内通）

なりよししんわう　成良親王。　後醍醐天皇の第四皇子なり。十五歳にして關東將軍となり鎌倉に下り給ふ。十六歳の時元弘の亂起り、北條高時の爲に桐が谷の牢獄に幽閉せらる。或日村上彦四郎の妹やよ梅狂女となつて來り親王をして遁れしむ。かくて親王落ち行き給ふ道に大庭別司の追擊に遭ひ給ひしが、名張八郎爲勝に助けられ、尋で新田義貞に迎へられ給ふ（相摸入道千疋犬）

にさぶらう　仁三郎。　奈良の遊郭吉田屋の主人なり。藤五郎の爲に吾妻を請出す周旋をなし、吾妻に腰刀の身を奪はれたるを氣付かず（淀鯉出世瀧徳）

にちざう　日像。　日蓮宗の高僧なり。月光の異母妹雨夜の前に逢うて法華題目を提唱す。平井兄弟格闘せる場に遇ひ、兩人を識して弟子となす。かくて後鹽谷左京時平の兵に寺院を襲はれ、また勅命と伴られて月光等と共に舟に乘せられ播磨沖に沈められんとせしが、法華經の功力によつて難を免かれて兒島三郎高則の家に養はれ、高則と佛法の問答をなして高則の疑を解き、妙法の不思議を見せて日蓮宗に歸依せしむ。かくて後勅命によつて月光と共に祈雨の修法をなして雨を降らす（大覺大僧正御傳記）

にゐどの　二位殿。　太政入道平清盛の室なり。清盛火の病に罹るや、二位殿の夢に獄卒火車を挽きて清盛を連れに來るを見て、之を能登守教經に語り愁歎せらる。是時平家に怨いて源氏に屬し兵を擧ぐる者多きを聞かれ、また膽恚無明の二つの火焰閃き轟いて清盛の臥所に飛入るを見られ、驚怖氣絶して侍女等に助けられ給ふ（平家女護島）

にゐのひめ　二位姫。　大納言民部卿藤原元方の次女なり。攝州天王屋の旅舍にて播州の武士桃園染五郎豐舟と契つて稀若を生む。然るに豐舟綸旨によりて二位姫の姉遊雲と婚することとなり、其祝言の時に遊雲の醜女なるを見て逃出す。遊雲この時豐舟と二位姫との情交を知りて嫉妬に燃ゆ。尋で二位姫は土師別當村正・官太村任に脅され、稀若を奪はれ

て川中に沈めらる。豐舟の家士眞砂勝海來つて二位姫の危急を救うて敵手に斃る。二位姫乃ち西王母の桃を吹込みて之を蘇生せしむ。かくて落ち行く途中村任に追擊せられしが、勝海の子の勝興に助けられて山城國美豆御牧に遁れ、狐川の堤より舟に乘る。この川に正八幡菩薩老翁に化現して釣糸を垂れ、淀鯉を釣り其口より稀若を引出して二位姫に授く。後、二位姫は大和路の郡山にて薄雲に絞殺さる（日本西王母）

ねのひ　子日。 賀茂社の巫女なり。大江千里を戀慕し、驪大臣の媒介によつて千里と相逢ふ際、嫉妬の間違ひより青柳を刺殺し、申譯なしとて千里と共に熊野の森にて死せんとして、冷泉坊の法印に諫されて思ひ止まる（驪大臣）

のぶたか　三條吉次信高。 金貨商なり。鞍馬山に牛若を尋ねて藤原秀衡の手紙を渡し、相伴ひて奥州に下らんことを約して別る。かくて牛若を伴うて奥州に下り、其歸途峯の桑師の笹谷にて、藤太が淨瑠璃姫を殺し其侍女をも斬らんとするに際會し、藤太と斬合ひしが、樵夫の通掛るを見て之に金を與へて藤太を殺さしむ（十二段）牛若を連れて奥州に下る途中、三州矢矧の宿に泊る（孕常盤）

のぶひさ　横山郡司信久。 伊豆相模を領し、太郎・次郎・三郎・照手・更衣の五子あり。信久・三郎の言を聽いて小栗判官兼氏を毒殺す。後、三郎に放逐せられて前非を悔い、蘇生したる兼氏を藤澤寺に訪うて謝罪す（當流小栗判官）

のりかぜ　若狭之介則風。 山上有風の嫡子なり。播州室津の遊女花月に劇染み、親より勘當を受けて零落し、花月との間に設けたる子金松を貧ひて唐人行列の繪草紙を賣る。是時藤照姫に扮せる花月と邂逅し、尋で入鹿の追手來つて花月を奪ひ去る。則風讃州志戸浦に赴き、五郎介と稱して浦の蜃滿月と契る。藤原鎌足・入鹿の難を避けてこの浦に來る。則風乃ち鎌足の命を奉じ、龍宮に至つて面向不背の玉を得んことを滿月に頼まんとする際、前妻の花月尋ね來る。則風怒つて花月及び金松を斬り、滿月をして海底を潜つて玉を探らしむ（大織冠）

のりつね　能登守平朝臣教經。 後寛僧都の室吾妻屋・平清盛に捕へられて其意に從はず。是に於て教經・吾妻屋に逢ひ、汝の貞節は我之を立てて取らすべし、汝は清盛の詞の立つやう返辭すべしとて暗に自害を諷す。吾妻屋乃ち自刎す。教經其首を包みて清盛に見す。是時俊寛の下人有王丸・清盛の邸内に亂入す。教經之を殺すを憫んで追拂ふ。丹左衛門尉基康・妹尾太郎兼康の兩人清盛の命を受け、鬼界島の流人成經・康頼召還の使者となつて行かんとす。教經乃ち俊寛をも召還せしめんとし、重盛の命と稱して俊寛赦免狀を認めて之を渡す。治承五年閏二月千鳥及び吾妻屋の怨靈現はるゝや、教經矢を放つて之を調伏し、二位殿に逢ひて平家衰運に傾けるを夢みたるを語る。是時諸國の武士平家に叛きて源氏に應ずる者多しとの注進あり。教經乃ち宗盛と談合し討手の手分せんとす（平家女護島）

屋島の合戰に教經兵船を敵陣近く漕寄せて名乘を揚げ、義經を狙ひて射殺さんとせしを、佐藤繼信進み出て義經の身代りとなつて教經の矢先に立つ。教經乃ち繼信を射殺す（津戸三郎）

のりのぶ　藤原花二郎教信。 坊門中納言資雄の子なり。幼時母に連れられて藤原敎孝に養はる。長じて己が實父は高槻吉内左衛門友重に殺されたるを知り、亡父の仇を報ぜんとして變裝し、津の國櫻塚にて祭文を語り、友重に遇うて敵討の聲を掛けしが、そは友風が養父友重の身代りとならんとして友重と名乘れるを聞き、且病身なるを見て、全快の上勝負を決せんことを約して別れしが、友風病死して中山寺に葬送せらるる由を聞き、其實否を確めんとして中山寺に赴き、友風の死體に我嫂の亡魂の入替れるとは知らずして生ける者と思ひ、其身怯を罵りしが、其實を知るに及んで人生の無常を歎き、これより發心して教信法師と法名し、嫂の末子を佛門に入れて補佐し、七墓地を巡りて飛田墓所に終死せる甥眞光を蘇生せしめ、賀古の庄に寺院を建てて回向の大導師となる（賀古教信七墓劇）

のりより　源範頼。 頼朝の弟なり。伊豆の修禪寺にて落飾し法名を源雄と云ふ。曾我の下人鬼王に遇ひ、曾我二子の爲に富士裾野の營中に入り得る割符二枚を與へて幕府に出頭し、鹿臨の捌をなせる際、梶原平次景高より割符を奪擬せられて口論し、怒つて景高を斬らんとして果さず、其家來八幡三郎を斬つて自刎す。行年三十五（曾我會稽山）

はいあん　梅庵。 醫師なり。扇屋の名妓夕霧の病氣を診察し、病篤くして醫藥も效なきを語る（夕霧阿波鳴渡）

はいぶんせき　裴文籍。 唐土の照宣皇帝の勅使と稱して渡來し、延喜帝に謁見して菅丞相の學德を賞揚せしが、藤原時平の暗略を受けて菅丞相を讒す（天神記）

はいりよう　赤松梅龍。 岡崎村に住し、太平記講釋師にして、大經師以春の下婢たまの伯父なり。以春の妻おさん・手代茂兵衛と不義に陷るや、たまを其媒介をなせるの故を以て、手代助右衛門に縛せられて梅龍に預けらる。梅龍は助右衛門がたまを縛したるを怒つて之を毆打し、又たまに理非を說いて之を殺し、玉の首桶を携へておさん・茂兵衛の刑場に赴き、たま一人を罪しておさん・茂兵衛を救はんことを請うて拒絶せられ、心錯亂して傍觀しゐたる助右衛門に斬付く（大經師昔歸）

はいろくわう　貝勒王。 韃靼主順治大王の鎭護大將なり。韃靼主の使者となり、明に朝して貢物を獻じ、華清夫人を調ふを口實として、明の逆臣李蹈天と謀つて明を滅さんとし、遂に韃靼兵を率ゐて來襲せしが、九仙山の戰に敗れて吳三桂・鄭芝龍に殺さる（國性鎧合戰）

はうくわん　馬府官（ばふくわん）**の誤。** 福建國守劉乃耶六安王の臣なり。陶民子が寶劒を鍛ふる劒奉行となり、陶民子の妻に寶劒を厚遇へられたるを知らずして持歸り、その欺かれたるに氣付くや、兵を率ゐて陶民子を襲うて朱一貫及び紫燕と屋上に格鬪して投飛ばさる。（唐船噺）

はうげんれい　房玄齡。 唐太宗皇帝の臣なり。日本に贈らんとする花原磬・潤潤石・面向不背の玉に就いて意見を述ぶ（大織冠）

はうしやう　平井保昌。 源頼光の家士